

## Japan Biotech Forum : London 2010

### 参加報告

森下節夫

(財)バイオインダストリー協会

#### はじめに

Japan Biotech Forum はロンドンで日本人が経営するアライアンスコンサルティング会社の transB 社が主催するイベントであり、今年で 2 回目の開催であった。フォーラムの趣旨は日本の優良創業系バイオベンチャーを英国や欧州の製薬企業や投資家に紹介することであり、イベントスタイルとしてはベンチャーが順番にプレゼンテーションし、その後希望の相手と one-on-one meeting を行うというものであった。今回 transB 社より日本のバイオ産業の概況、特にバイオベンチャーを取り巻く環境についての講演依頼があり、当該フォーラムに参加・講演をしてきたので、その状況を報告する。

#### 1. 我が国のバイオベンチャーの状況

近年ベンチャーキャピタルの投資が極めて低調なことがあり、概して我が国のバイオベンチャーは資金不足になってきている。JBA が毎年実施しているバイオベンチャー数の調査では、2006 年の 587 社をピークに毎年減少しており、2008 年に 569 社となった。近年では起業数より廃業数のほうが多くなっており、起業そのものも低調である。このような厳しいファイナンス環境の中で、創業ベンチャーは製薬企業等とのアライアンス締結を第一の目標として、手元資金を節約しながら何とか研究開発プロジェクトを前進させているところである。

#### 2. Japan Biotech Forum : London 2010

日本の創業系バイオベンチャーが欧米の製薬企業に対してアピールするために活用する機会として、近年では JETRO 支援による米 BIO International

Convention への参加や欧州 BioSquare への参加、または国内で開催されるバイोजパンへの参加がある。展示会を含むこれらの大型イベントとは別に、主催者側でプレゼンテーションする企業を選ぶ、あるいは、希望者のうち質が高いと主催者側が認める企業のみ発表できるイベントがあり、これらは質の高い企業のプレゼンテーションを一度にまとめて聴講できるという点で、聴講側にとって大きなメリットがある。海外では JP Morgan Healthcare Conference など、国内では野村バイオコンファレンスがそのようなイベントに該当する。

今回報告する Japan Biotech Forum も発表企業の質の高さを重視し、主催の transB 社が発表企業を選択するタイプのイベントである。今回の発表企業は次の通りであった。

- ・キャンバス (創業：がん) [マザーズ：4575]
- ・リブテック (創業：がん)
- ・レグイミュン (創業：免疫疾患)
- ・カイオム・バイオサイエンス (創業支援：抗体作製)
- ・デ・ウェスタン・セラピューティクス (創業：がん等) [ジャスダック・ネオ：4576]

また、ベンチャー以外のスピーカーとして伊藤忠・先端技術戦略室でバイオベンチャー投資を担当する阿部剛士氏・小野 高氏、大日本住友製薬ヨーロッパでアライアンスを担当する松尾徳幸氏、ベンチャーアドバイザーの岡本智美氏、そして小職の 4 名が、それぞれの視点から日本のバイオ産業を紹介した。

2010 年 9 月 9 日 (木)、快晴の下、バッキンガム宮殿近くの The Royal Society にて開催された。スピーカーを除く参加者は、グラクソ・スミス・クライン、アストラゼネカ、ノバルティス、ノボ・ノルディスクなど大手製薬を含めて 66 名であり、盛況であった。

午前中のセッションではキャンバスは抗がん作用を持つペプチド医薬候補品 (Phase II)、リブテックはすい臓がんへの抗がん作用を持つ抗体 (前臨床)、レグイミュンは免疫調節作用を持つ医薬候補品 (前臨床)、カイオム・バイオサイエンスはニワトリ細胞を用いた

高速抗体作製技術と、それぞれのライセンスアウトを目的としたプレゼンテーションを行った。デ・ウェスタン・セラピューティクスは残念ながら当日欠席で、代理として transB 社の古関千寿子社長がスライドを説明した。

これらのプレゼンテーションを聴いての第一印象は、日本にも欧米の創薬ベンチャーに伍する良い技術・医薬シーズがあるという実感であった。また英語であるにもかかわらずプレゼンテーションや質疑応答も洗練されており、全体としてレベルが高いという印象を聴衆に与えられたのではないかと感じた(写真1)。

午後のセッションでは、まず小職が日本のバイオベンチャーの状況について説明した。バイオベンチャー数が近年減少しているが優良なベンチャーは確実に開発ステージを進めるなど実績を積んでいること、製薬会社とのディールが多く成立しつつあること、近年の政府の施策などを説明し、最後に JBA 自身とバイオジャパンについて簡単に紹介した(写真2)。



写真2 筆者スピーチ

その後、小職、松尾氏、岡本氏と古関社長の4名で、日本の創薬ベンチャーに関する補足説明的なパネルディスカッションを行った。話題は主に知的財産戦略のことになり、日本のバイオベンチャーはもっと海外の専門家と組むのもいいのではないかなどの意見が出された。会場からは、iPS細胞技術などいいものがあるのにベンチャーで事業化されていないのではない



写真1 会場風景



写真3 one-on-one meeting

か、などの質問がなされた（リプロセルがあると古関社長が返答）。

### 3. パートナリングセッション

午後の多くの時間は one-on-one meeting に当てられた。事前に参加予定者のリストが配布されており、参加者は 8 名まで面談を希望する相手を指名できた。マッチングソフトウェアを使用せず、transB 社が膨大な対応表を手作業でアレンジしたとのことであるが、明らかにミスマッチな希望の優先順位を下げるなど、コンサルティング会社ならではの妙味を加えて面談が組まれた(写真3)。

小職からは英国のバイオ団体 BioIndustry Association に面談を申し入れ、持ち時間 15 分なので簡単な相互紹介に終わったが、非常に JBA とフォーカスが似ている団体であり、今後も相互のイベント紹介など情報交換するよう希望を伝えた。その他、企業コンサルタントや CRO 等の製薬・ベンチャー向けサービスを行う会社からの面談希望を受け、JBA として提供可能なサービスを紹介した。面談した中にはシーズ導入・開発型の創薬企業もあり、日本の創薬ベンチャーのシーズにも関心があるのとのことであった。

### 4. TV インタビュー

イベントと同時並行で、英国の製薬業界向けウェブ TV サービスの PharmaTelevision からインタビューがあり、当日のスピーカー

のうち小職を含む 5 名ほどがこれを受けた。小職からは JBA の歴史や、日本のバイオベンチャーが苦闘はしているが非常にいい成果を挙げつつあることなどを説明した。彼らは日本人にインタビューしたのは初めてのようであったが、古関社長から聞いたところによると、全インタビュー終了後に PharmaTelevision のスタッフが大変感心していたとのことであった。日本の存在感を示すことができたのは何よりの成果であった。

### おわりに

会場となった The Royal Society は 1660 年に起源を持つ世界で最も古い学会の、現在の事務局である。建築物はそこまで古くないと思われるが、かつて学会に在籍した科学者や現在の在籍者の肖像や写真がふんだんに飾られており、科学の歴史を感じさせる素敵な会場であった(写真4)。

開催直後の参加者（聴講者）の評判が非常に高かったとのこと、前述の TV インタビューと合せて、日本に優良なシーズ、優良なベンチャー企業ありということを示すことができたとの感触がある。このような有意義なイベントが、民間ベースで継続できるのは喜ばしいことである。JBA としても、バイオベンチャー支援の有効な方法の 1 つとして、今後は海外への情報発信に力を入れていくことが考えられる。



写真4 懇談風景